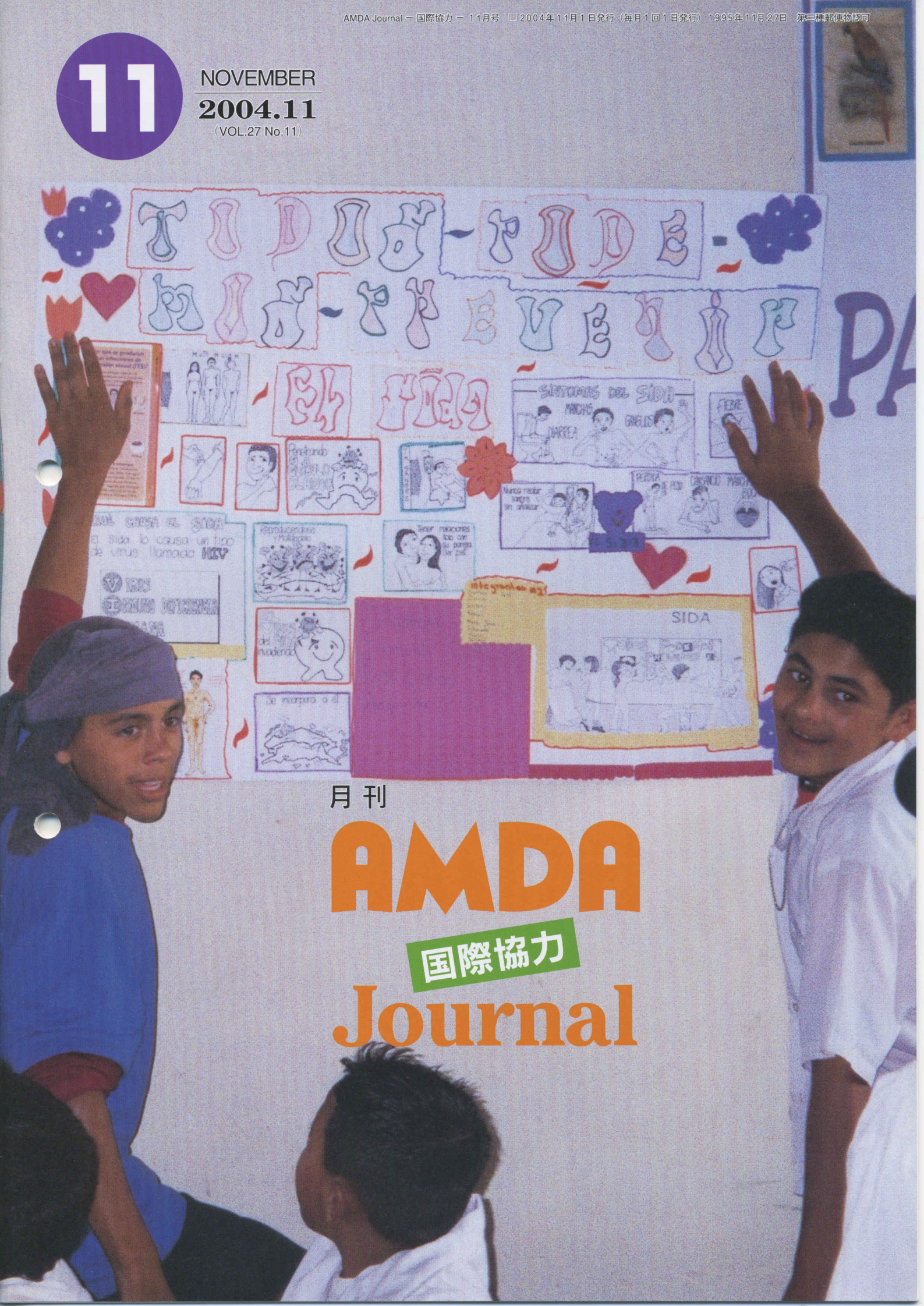
AMDA Journal ー 国際協力 ー 11月号　□2004年11月1日発行（毎月1回1日発行）　1995年11月27日　第三種郵便物認可

11

NOVEMBER

2004.11
（VOL.27 No.11）

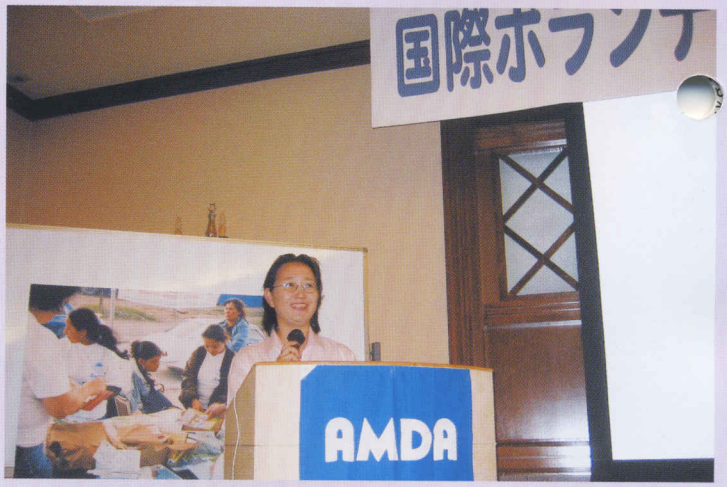


月刊

AMDA 国際協力 Journal

HIV/エイズ　AMDA実践報告セミナー（2004年10月11日）

国際ボランティア貯金事業活動報告会（2004年10月12日）
AMDAホンジュラス　青少年育成・HIV/エイズ予防教育プロジェクト



平成16年度国際ボランティア貯金寄附金の配分をいただいて実施している、AMDAホンジュラスのHIV/エイズ予防教育のプロジェクトについて、郵政担当の方々と市民の皆様を対象に、報告会を開催しました。現地でプロジェクトを実施している渡辺咲子調整員が、ホンジュラスという国の紹介、活動の詳細の報告、そして、予防教育ワークショップの一部を実践しました。ワークショップでは、来場された皆様にもご参加いただき、HIVの感染の過程について実感していただけたと思います。ご来賓の方々、ご来場いただいた全ての方々に感謝申し上げます。また、最後になりましたが、この報告会の開催にご尽力いただいた備前一宮郵便局の村野局長に、改めて感謝を申し上げます。

（報告会助成：（財）国際ボランティア貯金普及協会）

AMDA
国際協力
Journal
2004
11月号

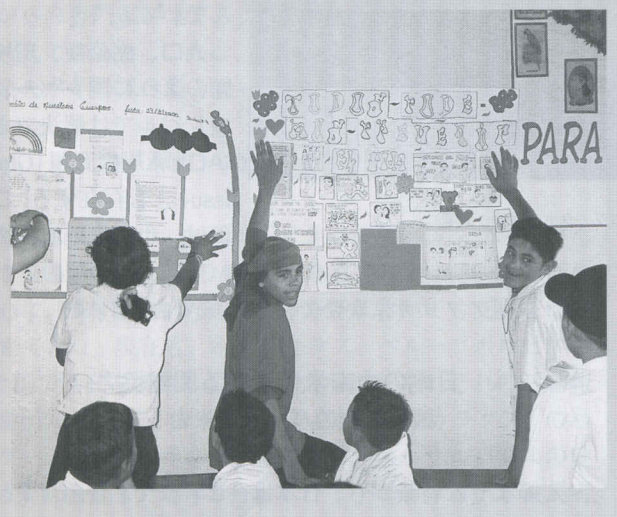
◇

CONTENTS

ホンジュラス：
巡回診療プロジェクト

◇中南米特集
なぜいま中南米への国際協力なのか …… 2
ホンジュラスプロジェクト …… 5
ペループロジェクト …… 8
ボリビアプロジェクト …… 11
AMDA鎌倉クラブ　音楽と国際協力 …… 12
◇HIV/エイズ AMDA実践報告セミナー …… 13
◇バングラデシュ洪水復興支援活動 …… 14
◇会員・寄付者名簿 …… 15
◇ハイチ洪水緊急救援活動 …… 16

表紙の写真



ホンジュラス
青少年育成・エイズ予防教育プロジェクト

ホンジュラスでの青少年育成・エイズ予防教育プロジェクトでは、首都テグシガルパ市の小中学校と協力して、エイズ予防教育を主とする青少年育成のためのワークショップを行っています。ワークショップでは生徒たちが積極的に参加できるよう様々な工夫をしています。また、ヘルスセンターにおける青少年診療、性感染症検査、カウンセリングも支援しています。

AMDAは中南米において、現在、以下のようなプロジェクトを実施しています。

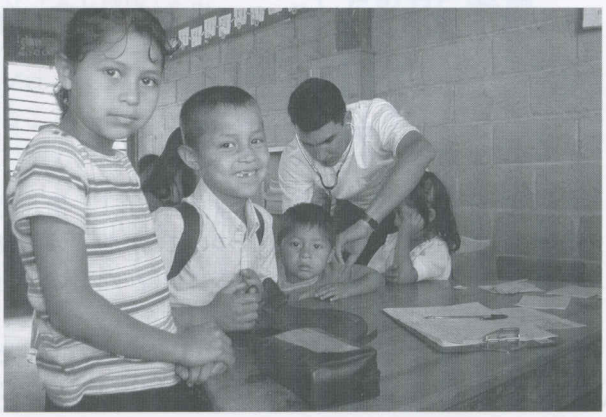
―― AMDA中南米プロジェクト ――

●ホンジュラス
青少年育成・エイズ予防教育プロジェクト
ヘルスボランティア養成プロジェクト
コミュニティ薬局運営支援プロジェクト
巡回診療プロジェクト
地域農林業振興プロジェクト

●ペルー
青少年のリプロダクティブヘルス教育プロジェクト

●ボリビア
救急救命医研修プログラム
救急救命関係者研修プログラム

●緊急救援活動
ハイチ洪水緊急救援活動（2004．9．25～）



なぜいま中南米への国際協力なのか

◇

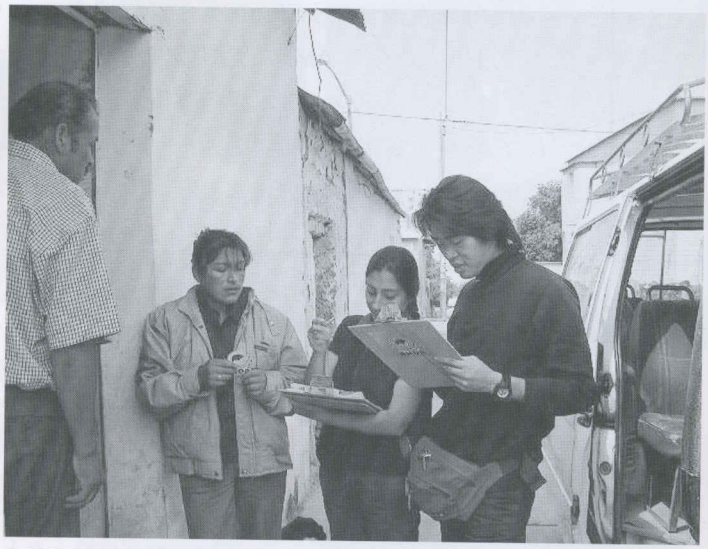
AMDA職員　田中　一弘

はじめに

中南米は遠い。日本から見れば地球の反対側に位置する。成田から飛び立ち、アメリカを経由し、丸1日のフライトを終えて、やっと辿り着ける。なぜ、そんなに遠いところまで赴いて、支援を行うのだろうか。近くのアジアにおいてもニーズはまだまだ多い。また、どうせ遠出をするのであれば、なぜより貧しいアフリカではないのか。

読者の方にも、そういった疑問を持たれる方も多いのではないだろうか。実際、日本の政府開発援助（ODA）は、アジアへの協力がその60%近くを占めるのに対し、対中南米の支援は10%に過ぎない。

そこで、中南米特集号にあたり、本稿では、日本と中南米の関係を考えながら、中南米への支援の重要性を認識し、そのなかでAMDAが果たせる役割とその可能性について検討したい。



ペルーの防災プロジェクト（右端：筆者）

日本と中南米の関係

日本と中南米は、その地理的な距離に反して、人的、経済的な関係は深い。まず、人的な関係であるが、19世紀末に始まった中南米への移住により、現在、約150万人もの日系人が中南米に住んでいる。これは世界中の日系人の約60%弱を占め、これほど多くの日系人が住んでいる地域は中南米以外にない。

次に、経済的な関係についてであるが、中南米地域の経済力の大きさに注目したい。外務省によると、国民総生産（GNP）は、中南米全体で約2兆ドルであり、これは、日本を除く東アジア全域のそれに匹敵する。日本は、銅、銀、鉄鉱石などの鉱物、コーヒー、サケ・マス、ブドウ、魚粉、大豆などの食料の多くを中南米に依存している。

中南米の可能性

中南米には、自然・人的資源が豊富に存在し、潜在的な可能性を秘めている。自然資源については、世界の水資源の3分の1、鉱物資源の3分の1、森林資源の4分の1を占め、さらに中東に次ぐ生産量を誇る石油を有するなど、とても豊かである。また、アジア、アフリカなどの国々と比べて、教育水準が高く、技術を持つ人材が多い。人口は、中南米地域全体で約5億人とその市場も大きい。さらに、民主化、経済の自由化が進んでいる国が多く、地域間協力も活発となっている。

中南米における開発課題

ここまで読み進めれば、「では、援助をする必要はないのではないか？」となるかもしれないが、そうではない。

既に述べたような潜在能力を十分に発揮できず、一部の人のみがその恩恵を受けるような状況が続いており、貧富の差の拡大が深刻な問題となっている。貧困層の人々は、人間の基本的ニーズ（BHN：Basic Human Needs）を満たすことができず、保健、教育などの基礎サービスが受けられない状態である。さらに、偏った開発により、環境破壊・汚染の問題も深刻化している。また、貧富の格差の拡大が、治安の悪化を招き、民主化や国家の安定を揺るがす危険性もはらんでいる。

人口、感染症、環境問題のように国レベル、地域レベルでは解決できない、地球規模問題（Global Issues）も存在する。これには、中南米地域の努力も欠かせない。HIV/エイズについては、その罹患率がサハラ以南アフリカに次いで多い地域である。

日本の中南米に対する国際協力（国際社会のパートナーとして）

このような背景から、日本は、これまで、貧困対策、保健医療、教育、環境保全、復旧・復興支援、文化遺産保存など、様々な分野で中南米地域へ支援を実施してきた。さらに、民主化促進、経済改革といった分野での協力も行ってきている。

中南米地域と一口に言っても、その中には、チリ、ブラジル、アルゼンチン、メキシコなどのある程度開発の進んだ国々と、ホンジュラス、ボリビア、ハイチなどのまだまだ開発の遅れている国々がある。前者に対しては、開発援助から経済協力（貿易・投資）へ移行し、国際社会のパートナーを目指しての協力が進められている。その例として、今年9月に署名された日本メキシコ経済連携協定があ

げられる。これは日本の経済連携協定としては、シンガポールに次いで2つ目となる。

一方、後者に対しては、貧困対策、保健医療、教育の分野においてニーズが高く、開発援助を継続している。また、中南米では、開発のレベルに関わらず、一概にどの国も貧富の差が大きく、貧困層への支援は重要である。

ホンジュラス農村開発プロジェクト（中央：筆者）

日系人を通じた協力

日本が中南米への国際協力を行う上で、注目すべきは、日系人との連携である。今年7月に、米州開発銀行（IDB）が沖縄において、日本と中南米の連携の中で日系人の役割についてセミナーを開催した。中南米には、現在、20万人以上の沖縄系移民が生活している。彼らが移住先の国々の開発、とりわけ農業分野に寄与した功績は大きい。今後、日本と中南米と繋ぐ掛け橋として、その両方の背景を持つ日系人の果たせる役割はさらに重要になるであろう。

AMDAは、昨年、IDBジャパン・プログラムのもと、日本の防災に関する経験をペルーの地域防災に活用するプロジェクトを実施したが、そこでは、日本、ペルー、ボリビアからの専門家が集まり、その活動を調整したのが日系ペルー人であった。これは、日本と中南米との連携において日系人がその掛け橋となった具体的な例である。

AMDAが果たせる役割

では、AMDAは、中南米へどういった支援を進めていくべきであろうか。AMDAは、これまでに、保健医療分野を中心に、農村開発、防災などの分野においても支援を行ってきており、現在も、ホンジュラス、ペルー、ボリビアの3カ国で活動を実施している（詳細は、それぞれの活動報告参照）。さらに、中米（ホンジュラス、ニカラグア）のハリケーンミッチ、ベネズエラの洪水、エルサルバドルの地震などの際、また今年9月よりハイチにおける洪水被災者への緊急救援活動も行っている。

AMDAが支援するのは、貧困や紛争など様々な理由で社会から疎外されている人々である。つまり、貧富の差の大きい中南米地域での、貧困層に対する活動が中心となる。また、地球規模の問題であり、ミレニアム開発目標（MDGs）の一つにもかかげられているHIV/エイズへの対策には、力を入れている。特に、予防教育・行動変容の分野では、ペルー、ホンジュラスにおいて経験を積んできており、参加型の手法を確立してきた。ここで、注目すべきは、HIV/エイズについては、日本の予防教育は遅れており、海外で培った技術を日本に還元できるところである。

また、AMDAの財産として、世界28カ国の支部とのネットワークがあるが、その中で、日系人が中心となっているペルー支部は、AMDAの中南米支援へ重要な核となる。今年8月、AMDAは第2回沖縄平和賞を受賞した。これには、AMDAが世界で実施する緊急救援や開発支援の活動が平和に寄与していると認識していただいたことに加え、AMDA沖縄県支部が、緊急救援に人材を派遣していることや、AMDAペルー支部において沖縄出身の日系人が活動をしていることも評価されたという背景がある。

さらに、AMDA中南米事業の支援としては、国内の支援団体であるAMDA鎌倉クラブが、1999年の設立以来、一貫してホンジュラスの活動を支援して下さっており、こうしたつながりを発展させていくことも今後の展望の一つである。

日本の中南米に対する支援がその重要性を増す中、中南米に拠点を持って活動している日本のNGOは限られており、その中で、AMDAがこれまでに培った経験とネットワークを活かし、中南米地域への国際協力に力を発揮する意義は大きい。今後のAMDAの中南米における活動に是非注目していただきたい。

味の素グループ様が、「食と健康」を中心とする社会活動をグローバルに推進することにより、健康で活力ある社会の実現に努めようとされる趣旨の『あしたのもとクリック！募金』において、AMDAペルーの「HIV/エイズ予防教育：性に関する健康の教育」事業をご支援くださっています。

クリック！
あしたのもと募金
あなたの優しさを形にします
一番支援したい寄付目的を以下から1つ選んでクリック！
あなたに代わって、味の素グループが1円を寄付いたします。

http://www.ajinomoto.co.jp/phila/

AMDAのホームページからも、募金にご協力頂けます。皆さまのご支援をお願いいたします。

沖縄平和賞をいただいて

国連医療NGO・AMDAの活動

菅波 茂

「慟哭の歴史」に重み
共通する平和への思い

第二回沖縄平和賞受賞の連絡をいただいた時に嬉しさとともに、この平和賞の重みをずっしりと感じました。それは沖縄の平和への慟哭の歴史でした。そして、その沖縄が世界に発する平和の重みでもありました。この重みこそ沖縄が平和賞をだす正統性の根拠です。

国連医療NGO・AMDAの平和の定義は「今日の家族の生活と明日の家族の希望が実現できる状況」です。今日の家族の生活とは食べられて健康であることです。明日の家族の希望とは子どもに教育を受けさせることです。そして平和を阻害する要因として、戦争、災害そして貧困があります。

AMDAはこれらの要因を解決するために必要とされる保健医療プロジェクトを世界中で実施してきました。難民や被災者への人道支援活動や貧困に対する社会開発活動を実施した国は、一九八四年の設立以来二十年間で五十カ国にもなります。活動の基本理念は「困った時はお互いさま」という相互扶助の精神です。

不可欠な「尊敬と信頼」

AMDAが世界の平和を実現するためにさまざまな国際人道支援活動を実施する理由は「多様性の共存」にあります。すなわち、物の見方や考え方が異なる人達が、民族、宗教、文化などを超えて、共栄共存するためには「尊敬と信頼」の人間関係が不可欠と考えているからです。

プロジェクトを共に実施する過程において、自分にないすばらしさを相手に見た時に尊敬の念が生じますし、どんなに困難が大きいからといって相手が決して放棄しない時に信頼の念が生じます。尊敬と信頼の人間関係を産み出す、苦労を共にする人間関係をパートナーシップとしています。このパートナーシップの世界的なネットワークこそ「多様性の共存」を可能にし、世界各地の紛争解決に寄与できると信じています。

AMDAは世界二十八カ国に支部を置き、AMDAインターナショナルとしてネットワークを組織しています。そして活動（問題解決）の原則は、現地の価値観を優先するローカルイニシアティブです。

沖縄移民は日本の財産

AMDAがめざす「多様性の共存」の視点から沖縄県支部の皆様と共に分かち合いたいと思います。

敵対する双方に支援

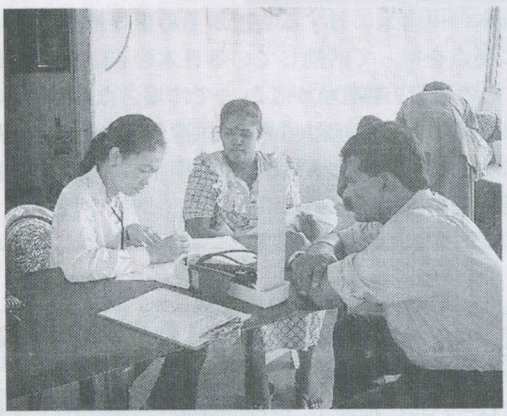
二つ目は摩文仁の丘において。現在は約二十年間に及ぶ紛争に停戦合意したスリランカで昨年より敵対していた三グループの地域で公平に医療プロジェクトを実施しています。

また、「AMDA魂と医療のプログラム」があります。AMDAが活動を行っている国々には、第二次世界大戦において戦場となった地域が多々あります。ミャンマー、カンボジア、ベトナム、インドネシア、フィリピン、パプアニューギニア等々です。

こうした国々で、一年に一度、日本と現地の宗教者が合同で慰霊祭を行っています。二度と悲劇を繰り返さないために、戦争で亡くなった人たちの霊を敵味方無く慰霊し、残された人たちのために医療を提供し、平和構築に寄与しようというプログラムです。戦争が歴史となるためには三世代百年間を必要とします。私たちの父の世代に起こった不幸な出来事を繰り返さないよう、「尊敬と信頼」の人間関係醸成に向かって取り組みつづけたいと思っています。

最後になりましたが、沖縄平和賞の趣旨である「沖縄世界平和イニシアチブ」にAMDAの活動が少しでも寄与できるようにますます精進を重ねたいと考えています。皆様方の暖かいご指導とご支援をよろしくお願い申し上げます。

（すがなみ・しげる　特定非営利活動法人アムダ理事長）



2003―04年の「スリランカ医療和平プロジェクト」で巡回診療中のカンボジア人医師ポーン・サンバス・パンさん

沖縄とAMDA

□AMDA沖縄支部（大仲良一支部長）の緊急救援
①ニカラグアハリケーン（1998年11月）
沖縄支部初の海外の緊急医療活動
②エルサルバドル大地震（2001年1月）
比屋根勉医師を派遣
③インド大地震（2001年1月）
毛布288枚を送付

□AMDAペルー支部（アウグスト・ヤマニハ支部長、沖縄の移民関係者が中心）が活動
①緊急救援
・ベネズエラ大洪水（1999年12月）
・エルサルバドル大地震（2001年1月）
②HIV／AIDS予防教育プロジェクト
ペルーの首都リマ市の公立学校において児童・生徒を対象に予防教育を実施
③災害マネージメント能力向上プロジェクト
IDB（米州開発銀行）ジャパン・プログラムのもと、ペルー南部において地域防災能力向上のための活動を実施（2003年）
④ペルー支部主任調整員のヨシ・ヤマニハ氏が沖縄で開催されたIDB主催のセミナーで発表（2004年7月）

ホンジュラス活動報告

◇

AMDAホンジュラス　渡辺　咲子

AMDAホンジュラスでは、1998年のハリケーンミッチ被災者への緊急医療救援より引き続いて、長期的な保健衛生活動を行っています。

ホンジュラスという国は、まだまだ日本では馴染みのない国だと思います。ハリケーンミッチの時には、初の自衛隊の緊急援助が行われ、日本のメディアを騒がせました。このとき、自衛隊派遣には、日本だけに留まらず、世界が目を向けていたことを思い出します。しかし、6年目を迎えた今、この中米の小さな国の名前さえ過去のものになってしまったのではないでしょうか？ホンジュラスは1人当たりのGNPが927ドル、日本の30分の1という貧しい国です。

1日1ドル以下で生活している貧困者が国民の70%を占め、その50%は最貧困層と言われています。日本のマスコミで取り上げることが少ない、この小さな国で、今何が起こっているのでしょうか？

1985年、プエルトコルテスという港町でホンジュラス最初のエイズ患者が登録されました。たった一人のエイズ患者が、今では約60,000人のHIV感染者に増えてしまったのです。この感染者数は、中米一となり、同地域の60%を占めます。

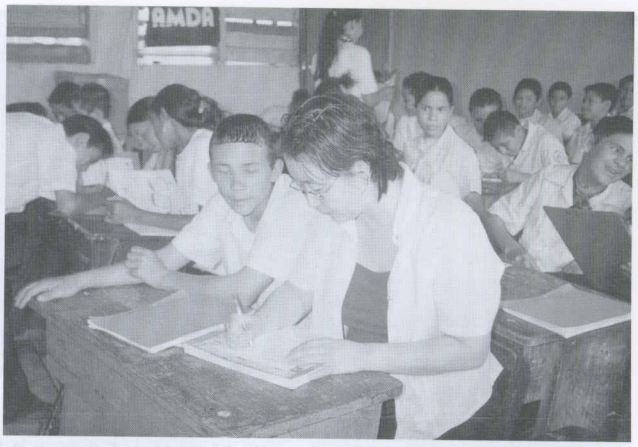
60,000人という数は、15歳以上のホンジュラス国民の1.2%を占めています。1年間で、600から1,200人の新しい感染者が増えています。感染者の50%は15歳から24歳の間で感染しているということも忘れてはいけないと思います。この年齢で感染するということは、彼らが次の世代で親になった時に子どもに感染する、さらに彼らが亡くなった時には、子どもがエイズ孤児になることが予想されます。

このようなことから、2000年よりAMDAでは、エイズ予防教育を開始しました。エイズ予防教育を学校やコミュニティで行っていますが、彼らの知識の低さや、エイズについて、間違った知識を持っている人がたくさんいることに驚かされるとともに、エイズの知識を与えることだけでは予防に繋がるものではないことを実感しました。

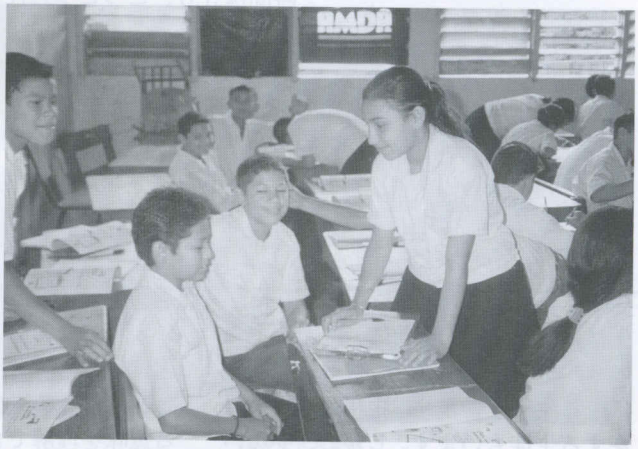
HIV感染経路のほとんどは性交渉によるものです。20歳までの女性の出産率が50%ということからも、性交渉の開始年齢が日本に比べとても早く、コンドームの普及率も低いうえ、女性たちは、妊娠しないためだけに、手軽な避妊法として、ピル（経口避妊薬）を使用することから、性感染症、HIVから身を守ることができない状況なのです。

そこで、エイズ教育の場を、コミュニティから学校へ移し、思春期の若者が、自分のセクシュアリティー（性）を理解し、自己尊重、コミュニケーション、将来の展望を明確にできるように、青少年育成というプログラムを作成しました。この青少年プログラムは、ホンジュラス保健省の教材に、AMDA独自の参加型手法を組み合わせ行っており、学校での活動は今年で3年目になりました。生徒たちからも、「この授業があるからそれを楽しみに来た」、「学校の先生や、親からは聞けないことを聞くことができる」という反応があり、授業をする私たちにもやる気を起こさせてくれます。最初の年にこのプログラムを受けた生徒は、中学を卒業し、高校2年生になりました。高校生になった生徒たちは、母校を訪れ、私たちに声をかけてくれたり、後輩に、私たちの話をよく聞くように促してくれます。3年前小学6年生で、クラスで一番小さかった男子生徒は、教師たちから、横着で扱いにくく、とても卒業できないだろうといわれ、学校が終わると、市内の繁華街で、物乞いをし、自分のお小遣いにしていましたが、3年後に出会ったその少年は、きちんと中学に進級し、いまも勉強を続けています。

私たちの活動地域は、貧困層の居住地区で、生徒たちの



ロールプレイを用いたワークショップ（右が筆者）



ワークショップは、お互いのことを知り合うところから始まる

ワークショップに参加した生徒たち

スタッフ紹介

AMDAホンジュラスには2人のスタッフが勤務しています。

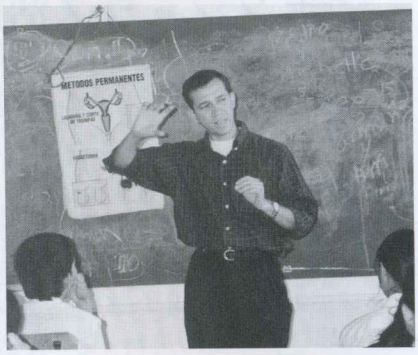
２人とも過酷な業務にも、土日の仕事にも、いやな顔ひとつせず、がんばってくれています。

カルメン

カルメンは日本人の私より日本人らしい人です。

時間は守り、こつこつと仕事をこなし、整理整頓が大好き。

私が探している書類をどこからか見つけてきて、ハイ、と渡してくれます。こんなことが続くと、思わず、「カルメンが私の書類を隠している！！」と思ってしまうのですが、彼女に言わせると、私の記憶力が悪すぎるのだ、とガツンと言われてしまいます。



エメルソン

何でも屋のエメルソンは一家に一台？いてくれるととても強い味方です。

エイズ教育、救急処置から車の整備、電気修理、さらには人生相談もできます。

人当たりがとてもよく、AMDAホンジュラス広報担当？とも言われています。

中には、学校に来る前に、新聞や主食のトルティージャを売ってから、学校に来る生徒もいます。中には、物乞いをする生徒もいます。しかし、少ない収入でも、子供たちが簡単にそれを手に入れることは、学業を挫折させる要因にもなりかねません。そんな彼らに、将来の希望を持たせ、勉強を続ける意味を理解できるようなお手伝いができたらと、考えています。

この活動は、国際ボランティア貯金、フェシリモ地球村の基金、AMDA鎌倉クラブのご支援を受けて行っています。

トロヘス・農林業を通じたコミュニティ開発支援

◇

派遣専門家　海口　光恵・庄司有輝子

1. 事業の概要

ホンジュラスの中東部に位置する農村地域トロヘス市においては、これまで実施されてきている保健衛生活動を通じて、住民の生活向上を実現するには、彼らの活動の中心である農業、そしてそれを支える自然環境を向上させることが重要であることが明らかになった。これをうけ、一昨年度に同市の10村落に対して、森林、農業、栄養状態および生活状況について調査を実施し、様々な問題が確認されたと共に、生活状況を向上させたいという住民の意欲も明らかになった。この結果を踏まえ、昨年度は、多種類の野菜栽培および果樹・材木用樹種の植栽を実施し、現地農林業技術者と協力し、その後の活動のフォローアップを実施した。今年度はさらに対象地域を広げ、活動を継続している。

2. 今年度事業

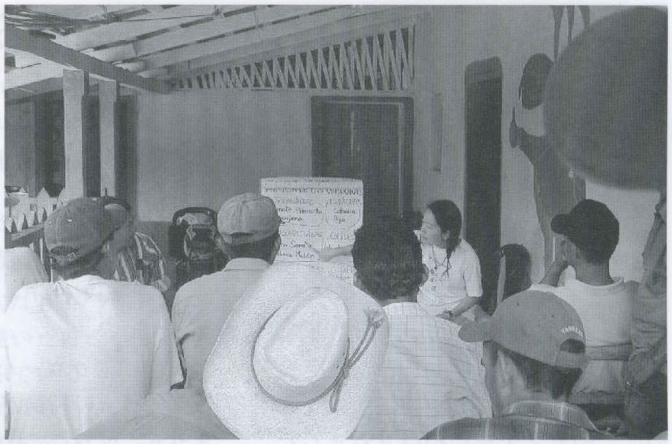
①農業

2004年９月より約2ヶ月間、現地農業普及員と共に昨年度の事業評価、新たな地域での調査、および2村（グアニート、サンアントニオ）での、栄養・生活改善を目的とした、野菜栽培および既存の栽培技術の向上、省エネかまど作りを行っている。

講習を行う海口専門家

昨年に続いて、この事業も２年目となったグアニート村では、昨年の経験を生かして、積極的に野菜栽培を行っている人も少なくない。トマト、ピーマン、キャベツ、キュウリ、二十日大根、ニンジン等、日常食べなれているものから、新しいものまで栽培している。日頃村では手に入りにくい野菜を家庭で自給できることは、栄養状態の改善また生活の向上につながるものである。今年はその定着とともに、さらに多種類の野菜を栽培し、基礎知識の向上をはかろうと、農家の方々も積極的に参加している。

木の育成状況調査



講習を行う庄司専門家

収穫された野菜

実ができた果樹

そして、昨年、実験的に設置した省エネかまどは、薪消費の削減と、煙による健康不良の改善、住環境の改善につながると、現在、村民の注目を浴びる存在であり、今年はより多くのかまどを設置する予定である。

今年からこの事業を開始するサンアントニオ村では、野菜栽培は全くの初心者であるが、グアニート村と同様、彼らが家族の栄養状況、衛生環境に意識を持ち、既存の栽培技術(雑穀類)の向上へもつながるような活動を行っていきたいと思う。

2村とも、栽培講習会と共に、農家巡回、野菜料理教室を行っていく予定である。そして派遣期間終了後は、現地普及員が引き続き、事業を継続していく。短い期間ではあるが、農家の方々に貢献できるよう、がんばりたいと思う。

②植林

前年度の2村(農業と同地区)における事業の評価については、いくつかの課題もあったが、みかんやマラカジャなど既に結実したものもあり、住民も自ら1本1本の木に防護柵を作るなど、インパクトのある結果が得られたと考えられる。

今年度はサンアントニオ村において、事前に植林の技術的指導と現地専門家による森林環境問題に関する講習会を、学校生徒と男性グループに対して2回行った。その後、2日間に渡り、植林予定地の下地整備と、学校・サッカー場など4ヶ所に232本の果樹・材木用樹種の植林を実施した。またこの植林体験を踏まえ、各家庭でも植樹できるように193本を配布した。(1家庭あたり4～5本)当日、現地では道路舗装事業が重なり、ヘルスボランティアが参加できず、まとまりと参加者数の減少が懸念されたが、青少年を中心に30名ほどが参加し、迅速に手際よく植林することができた。また女性も数人ではあるが、苗木配布の手伝いをするなどの参加がみられた。植林活動後すぐに、家畜用防護ロープを設置し鉄線を自ら購入、またサッカー場に植樹した木々には防護柵を設置、そして蟻駆除対策を行うなど、住民の木を守ろうとする思いと植林活動への積極的な姿勢を伺うことができたと考えられる。「子ども達のためにフルーツの森を作る」と学校周辺には主に果樹を選定し、一所懸命植える住民の姿に、目を細める思いであった。

今後は農業事業同様、現地専門家によるフォローアップを続けていく。内容は病害虫対策などの講習会の開催、樹木の生育と防護柵の設置確認等である。

トロヘスはほぼ全域において森林破壊が進んでいる。現在もなお、数年前の松くい虫被害の爪あとや農地化のための焼畑、放牧そして薪取得による樹木伐採が続いている。そのような現状を前に、大量生産でき多数の住民が参加しやすい播種からの苗木の育成と苗畑づくりといったような事業形態が求められるであろう。同時に、確かにこの事業を通じて、住民に周辺森林環境問題に対する意識の変化が現れ始めたのも事実である。住民自ら樹木用の種を購入し、苗畑づくりを試みる計画も練られている。今後も彼らとともに長期的視点に立って、森林環境問題に取り組む姿勢が必要であろう。

この活動は(社)国際農林業協力・交流協会のご支援を受けて行っています。

心に残る思い出

◇

AMDAペルー調整員　ヨシ・ヤマニハ
（翻訳　藤井倭文子）

今年7月、米州開発銀行のジャパンプログラムは沖縄でセミナーを開催しました。日本の国際協力に関係するプロジェクトに参加している私は、日本と中南米間の関係をより強くする一つの手段として私の体験談を発表するためにこのセミナーに招待されました。

これらのプロジェクトに関与しているという事で、私は先祖の文化（言葉を含めた）についてより深く理解する必要性を感じていました。ペルーの日系コミュニティはそのメンバーがそれぞれの先祖から受け継いだ習慣や考え方を通して相互にふれあう場所でした。しかし、現在その範囲はもっと広くなり、日系コミュニティは日本と中南米の掛け橋としての大切な要素を持っていると思います。

沖縄では、ゴーヤチャンプルやその他沖縄独特の食物や飲物（泡盛）等をいただきました。父母の両親が沖縄出身なので、沖縄には特別な思いがあります。

私は浜松で弟を訪ね、2日間過ごしました。その間に今迄こんなに夢中で話しこんだ事が無いという位話がはずみました。お互い近くにいると当たり前の事と思う小さな事の大切さを我々の距離が認識させてくれました。

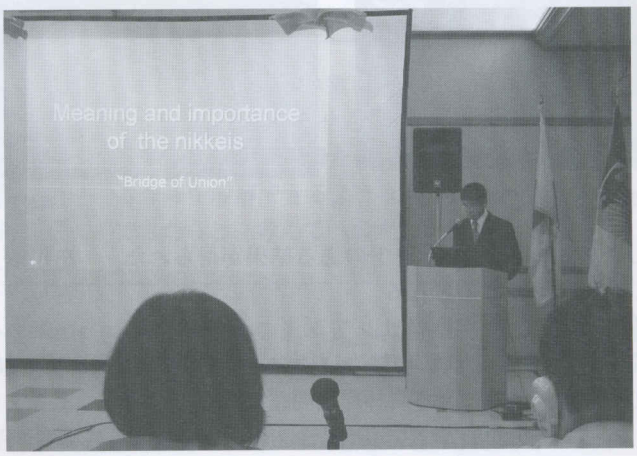
岡山ではAMDA本部を訪れました。スタッフの皆はHIVの感染予防に強い関心を持っており、AMDAがペルーで開発し、実施しているワークショップをAMDA高校生会のメンバーとスタッフに対して行いました。

その後、私はAMDA本部の田中氏と神戸へ行き、支援を受けたフェリシモ基金事務所で活動を報告しました。東京では、以前ベネズエラで一緒に仕事をした事のある方々の歓迎を受けました。訪問する先々で友達に会うことができ幸せでした。

この場をお借りして、今回お会いした方々に心から感謝申し上げます。

アジアと中南米間で専門技術の移転におけるアジア系移民の役割
（沖縄のセミナーでの発表より）

世の中がグローバル化されても、我々一人一人の特徴が失われる事はありません。反対に、我々自身のアイデンティティ（独自性）を大切にし、特に価値観、文化、習慣等を維持し、これらを共有するものの結束力が強まります。この現実から逃げることなく、日系人は日系人だという自覚を持って、どこにいても日本と他の国々との“掛け橋”として努力しながら我々の存在の重要性やその意義について考える必要があります。



セミナーで発表する筆者

最初の移住者の犠牲と努力が日系コミュニティの出発点であり、我々を迎えてくれる社会からの尊敬と自信として財産となっています。彼等の子孫の教育に対する貢献は現在直面している様々な問題を解決する上で特に際立っています。

日系ペルー人として専門技術をペルーの人達へ伝える役割やアジアと中南米間の専門技術の普及についてコメントする前に、先ず私自身についてお話したいと思います。

私の先祖の故郷とは異なった国で育った私は度々自分のアイデンティティについて好奇心を抱いていました。私はペルーで生まれ、教育を受け、ペルー社会の中で育ってきたので、私はペルー人です。しかし身体的特徴や各家庭で代々受け継がれてきた伝統、価値観、文化について、日本やアジアのアイデンティティもあります。

日本人がペルーへ移住してから百年以上が経過し、祝賀行事が催され、その子孫は約五世代に及びます。80年から90年代、20歳から30歳位の多数の若い日系人は出稼ぎとして日本へ移住し、その他の若者はペルーに留まりました。ペルーに残った若者の多数は、政治、経済、経営、教育、そして文化面で活躍しました。彼等は国の発展を願って意欲的に、且つ積極的に貢献し、そのことが認められるようになりました。これは日本とペルーの間における相互理解の促進と友好関係を深める大切な役割を意味しています。

過去数十年にわたりこの役割を認識し、日系コミュニティへの支援が増えました。しかし、日系コミュニティが発展を目指すためにはペルー自体が発展する必要があります。

これに関連し、私が日系人としての立場から貢献できたと思っている技術協力分野においての私の体験をお話ししたいと思います。

幸運にも私は日本との協力関係の事業に従事しています。国内では、ペルーでAMDAが展開しているプロジェクトの調整員です。AMDAは開発途上国の人々の健康と生活環境を促進する事を専門としたNGOで、特に災害緊急医療救援や地域保健医療の分野においては経験豊かな団体です。AMDAは1984年に設立され、1995年に起こった阪神大震災では重要な役割を果たしました。

ペルーでは、自然災害から免れるために常に努力しています。そうする事で増収と貧困の減少を期待しています。2001年にペルー南部で起こった地震のような災害は投資面で数百万ドルに及ぶ損失と開発上数年にわたる後退

を生じました。災害に対応できる計画や準備体制を構築する事は人の命や財産を失う事を最小限に止めるために如何なる戦略においても主要な構成要素で、開発にはそれを継続する事が大切です。

日本では、自然災害と共存する事が生活の一端となっているため、この件に関しては経験豊かです。米州開発銀行のジャパンプログラムのもとで専門技術を移転するために、ペルーのモケガ県で"災害マネージメント能力向上プロジェクト"が2003年に実施されました。

プロジェクトは自然災害に対する住民の防災意識を高める、地方自治体、州政府、一般市民団体の能力を改善する目的で実施され、日本・ボリビア・ペルーの3ヶ国から専門家が参加しました。

ここで説明したいのは、アジアと中南米間で専門技術を移転する際、日系人として私がどんな役割を果たしているかについてです。

第1に、意思の疎通が挙げられると思います。これはアジアからの協力を受け入れるためにはアジア系の子孫だという事で自然な親近感やより深い信頼が生まれるために、無理の無いアクセスができます。同様に、日系人がペルー人社会においても政治、経済、文化、教育の分野で専門家としての立場を確立しているため、彼等の協力とネットワークを通じて、より優れた発展を目指す事ができます。

2番目に、日系人の専門家や技術者が参加する事は資源の節約にもなり、効果的、効率的な協力が可能となります。日系人の人件費は地元の所得レベルに基づいたものとなります。また、地元の社会に精通しているため、課題（ニーズ）をよりよく理解でき、有効な対策を考えることができます。

3番目に、イメージ（一般概念）という点があげられます。日系人は我々の先祖から受け継いだ確かな価値観を持っていると思います。その点で、日系人を通しての日本からの協力はペルー人社会において日本の存在感を表せます。その上、彼等は日本とペルーの掛け橋として両方の国を理解するにふさわしい能力を持っています。

AMDA本部にて、菅波代表（左）と筆者

日系人の技術的能力は国際協力における人材として評価されるべきであり、日系人の役割は経済、技術協力、人材開発の上でもその力を発揮できると思います。ここで私は協力の形態について述べたいと思います。最初のケースとして、日系の専門家を日本の協力機関から他の開発途上国へ派遣する事は技術協力の面でより大きな効果と能率を上げると思います。2番目のケースとして、日本から派遣された専門家や派遣者は、事業調整や、新しい技術の適応などにおいて、日系人からのサポートに期待できます。

日系人の才能を専門技術の移転のための掛け橋として利用する過程ではいくつかの変化を必要とします。

これらの変化の一つとして人材資源の能力向上を支えるために、日系人の地位と能力を向上させる必要があります。これは地元レベルで行なうこともできますし、また、過去に行われた様に国際レベル（日本または第三国）で専門的な奨学金制度を設ける事もできます。これはペルーの発展に貢献できますし、間接的に日本のイメージを改善し、その上、日系コミュニティへの支援と日本を理解するための媒介者としての能力向上は好意的な相互関係を深めるために貢献することができます。

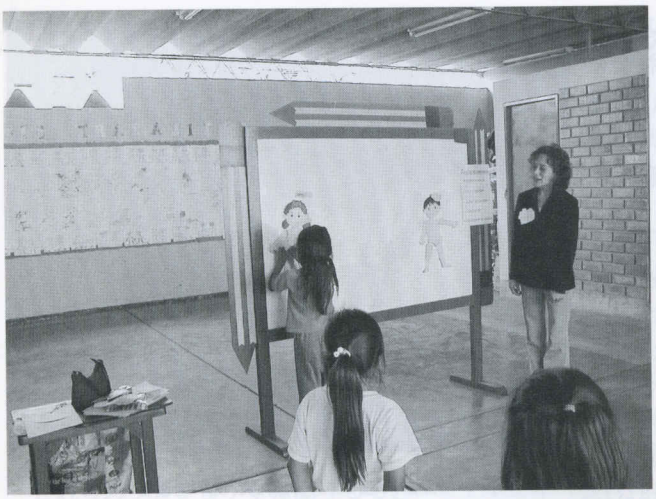
AMDAペルーの活動

日系コミュニティに直接関係している別の局面は、個人的には成功していても統合されていないために地域社会の一員としてコミュニティのゴールに到達も貢献もできていない事です。日系人としてのアイデンティティはそのうちに薄くなり、我々先祖の出身国とのつながりも次第に失われる不安を感じています。専門技術の移転に日系人が参加する事は彼等のルーツを再確認する機会や日本との関係を促進する事ができます

出稼ぎに関しても少し触れました。幸いにも、日本の対外貿易政策の中に日系人が居住国へ帰国後彼等の仕事や職業について支援するガイドラインがあります。

今年の5月、ペルー人の出稼ぎ労働者の帰国後の起業を支援する事業に関して、米州開発銀行とペルー日系人協会が同意しました。この事業は自発的にビジネスを行なうための研修、すでに起業したビジネスマンへの中期及び長期の資金調達に関する相談サービスを含んでいます。ペルー人コミュニティの中でリーダー的な役割を果たしている日系人で投資に関する十分な専門知識を持ちアドバイスが提供できる人は自発的に参加しています。これはアジアと中南米の専門技術を移転する上でアジア系移民による役割の明確な例です。

この事業はペルーで日本人による中小企業を拡張できる可能性を考慮して出稼ぎ労働者が持つ能力を活用できる道を開く事にもつながります。ペルー人の出稼ぎ労働者は日本から習慣、価値観、企画の大切さ、質の重視などに



リプロダクティブヘルス教育　ワークショップの様子

ついて学んだために、日本企業がペルーの現状により速やかに統合し、適切で競争できうるレベルに位置づけられると思います。

最後に申し上げたいのですが、日系人を専門技術の移転プロジェクトに参加させる事は、日系コミュニティの要望と希望に答える事になります。現在経済、政治、社会的な活動範囲でリーダーシップを取っている彼等の地位をより強くします。その上、日系人以外のペルー人も日本に対してより良いイメージと理解をもつ事になります。そして日本人も日系コミュニティの歴史と現状について理解を深める事ができると思います。

ジャスコ岡山店
AMDA支援チャリティー
「南米・ペルーの子どもたちをエイズから守ろう！」
10月30日（土）～11月3日（水）
ペルーの貧困者居住地区のエイズや性的虐待等の深刻な問題にさらされている子ども達を救って下さい！

リプロダクティブヘルスに関する行動を促進する活動

AMDAペルー　エスカルレット・パロミノ　イレネ・ヤマダ
（翻訳　菊井伸也）

リプロダクティブヘルス（性と生殖に関する健康）の問題に関するAMDAペルーの軌跡はHIV/エイズの予防に始まり、成功をおさめてきている。こうして活動の年月を重ねるうちに、思春期の若者はHIV/エイズが何であるかの基本的な知識は持っているが、様々な状況に直面して自らを守る（セルフケア）個人的な能力に欠けていることが分かった。そこには、彼らを指導する親や教師などの教育の手法が、こうした問題を総合的に捉えたものでないという問題もある。

このような理由で、われわれの活動は、統合的なアプローチをとっており、感情・心理・社会的な側面も考慮し、セルフケアの促進や生活の質の向上に役立つ手段として健全な習慣の形成も含んでいる。また子供や思春期の若者に、彼等の健康に影響を与える諸要因をよりよくコントロールできる能力を発達させるような学びの場を提供したり、個人的な資質を開花させる積極的な主体となれるように指導したり、彼等の人生の計画を実現させる“決断”ができるように方向付けをすることである。

われわれは活動の対象とする人々と彼らの周りの人々の意識を、リプロダクティブヘルスについて自分の知識や体験を見つめ直すことを通じて、高めていきたいと考えている。その中で、AMDAペルーが様々な参加型ワークショップの手法を用いて、それを促進する仲介者となる。

われわれが実行しているワークショップは、自尊心を高め、社会的能力を発達させ、感情の伝達や意思決定を促進し、さらに性の健康的な経験・発達が可能になるように、リスクの高い行動を予防する知識を提供する。

現在、性的虐待や若年妊娠が多い地区において、子供や思春期の若者、親や教師に対してワークショップの活動を行っているが、こうした活動が徐々に普及してきている。

われわれの活動は、対象の人々によく受けとめられており、そのことが、より効果的な手法を作り出そうとするわれわれの努力の動機となっている。

ボリビアプロジェクト

救急救命研修プログラム

AMDAボリビア調整員　マルタ・フォイアニーニ
（翻訳　小林　美保）

1998年以来、AMDAボリビアは災害時における医療の質を向上させるために、「緊急時における外傷への対応」に打ち込んできました。

今年はすでにATLS（Advanced Trauma Life Support：外傷救急救命研修）コースが4回開催され、年末までにATLSコースをさらに2回とPHTLS（Pre-Hospital Trauma Life Support：病院搬送前外傷救急救命研修）コース1回を計画しています。

4月16日～18日にポトシ市で開催された今年最初のATLSコースには医師16名が参加しました。全員がコースを修了し、4人が指導者認定を受けました。4人の指導者がサンタクルス市から赴き、ポトシ市のような町でコースが開催されるというのは珍しいことです。ポトシ市は高地にあるため、参加者の中には睡眠や呼吸の問題に悩まされる人もいましたが、講義や実技で支障を来すようなことはありませんでした。

第2回ATLSコースは6月11日～13日にサンタクルスで開催され、14人が参加しました。全員がコースを修了しました。

引き続いて第3回ATLSコースが7月23日～25日にサンタクルスで開催され、参加者16人中15人がコースを修了しました。

第4回ATLSコースは8月27～30日にサンタクルスで開催され、参加者14人全員がコースを修了しました。

現在は2004年11月5日～7日にラパス市で初めてのATLSコースを準備しています。これは国内で5番目の教育センター設立の重要な機会です。我々の理想は高く、目標を達成できると信じています。

今年最後のコースは12月3日～5日に開催予定です。今年初めてのPHTLSコースになります。

2005年には引き続き救急の外傷の診療を向上させ、できるだけ多くのコースを開催したいと計画しています。少なくとも毎月1コースを開催するのが目標です。

ルディ・ウスタレス・ロペス医師

私は一般外科の医師です。AMDAとホルヘ・フォイアニーニ医師（AMDAボリビア支部長）のお陰でATLSとPHTLSの指導者研修を終えることができました。これらのコースを通じて多くの町を訪れ、医師や救急救命士にあらゆる種類の事故に遭った患者の扱いを教育する機会がありました。さらにコースでは様々な国の人たちと出会い、個人的にもグループとしても価値ある経験を得る機会もいただきました。これに加えて私は危機管理の研修でFUNSAR（Fundamentals of Search and Rescue：捜索救助基礎）のボランティアグループも支援しています。数日前、FUNSARは我々のATLS、PHTLSコースで研修したメンバーでレスキュー911というプロジェクトを立ち上げました。

クリスティン・アニェス医師

私は心臓血管外科医です。フォイアニーニ・クリニックで一般外科のレジデントをしていたときにATLSコースを受講しました。外傷患者が危機的な状況にあるときの対処法を学べたので、このコースは私にとって非常に有益でした。たとえ私の専門では外傷患者に直に接することがなくても、この種の患者の診療について他の医師に意見を述べるのに役立ちます。

鎌倉クラブのコンサートの様子

AMDA鎌倉クラブ設立5周年
チャリティーコンサート

音楽と国際協力

AMDA職員　田中　一弘

台風16号が迫った影響で、関東でも雨脚が激しくなっていた。先の8月29日、私は、初めてAMDA鎌倉クラブのチャリティーコンサートに参加させていただいた。外の荒れた空模様とはうってかわって、会場である鎌倉芸術館の中では、開場の30分以上前からホールの前で並んでおられる方々の姿があり、とても温かい雰囲気が漂っていた。

コンサートは、大盛況であった。日本と中国の音が見事に重なっていた。満席の開場からは大きな拍手が湧き起こった。私は、そのとき、改めて音楽の力を感じた。こうしてたくさんの方が、音楽に惹かれて集まっている。そして、それが一つの力となり、地球の反対側にある中米のホンジュラスという貧しい国の人たちへの支援に繋がる。音楽と国際協力の接点である。

国際協力とはいくつもの「人」を通じて実現する。国際協力の必要性を理解し、支援に協力してくださる人。世界の状況を把握し、様々な国の様々な問題に対して、どこにどういった支援を行うかを判断する人。実際に現地に赴き活動を行う人。その活動の支援に協力いただいた方々に報告する人。どの人が欠けても国際協力は実現しない。

このコンサートを成功に導かれた皆様は、国際協力の必要性を理解し、支援に協力して下さる人である。そして、AMDAが、その後を受け継ぐ人となるわけで、その責任は大きい。私も、その一員として、特に、AMDA鎌倉クラブ様から継続して支援をいただいているホンジュラスの担当者として、コンサートに出席しながら、その気持ちを新たにした。

この場を借りて、改めてこのコンサートに参加されたすべての方に感謝いたします。

中国音楽と私

AMDAシニア・ボランティア・アドバイザー　小池　彰和

AMDA鎌倉クラブ設立5周年記念のチャリティーコンサートは立錐の余地もない盛況だった。根津伶子代表をはじめとするAMDA鎌倉クラブの皆様とその関係者の熱意と行動力がもたらした成果であったが、このコンサートのハイライトは、サブタイトルに謳われているように日中音楽の友好的演奏家たちであり、その気品溢れる演奏に陶酔した聴衆たちであった。

当日私はAMDA本部（岡山）から馳せ参じたのだが、演奏中脳裏に去来したのは今から15年ほど前まで北京で過ごした2年余の日々だった。社命により北京事務所開設に奔走していた私は、知人の紹介で著名な演奏家や歌手たちと広くお付き合いする幸運に恵まれた。東方歌舞団や民族歌舞団のスターたち、映画音楽監督、音楽院生などなどがそれで、単調な単身生活を時として彩ってくれた。中国で五指に入ると言われた演奏家が拙宅で名曲「十面埋伏」を弾いてくれたのもこの頃で、その感動は今でも忘れ難い。

AMDAが活動する難民キャンプでも少し落ち着いてくると歌声が聞かれると言う。音楽は人々に安らぎと生きる勇気を与えてくれる。ホンジュラスの恵まれぬ人々に明日への希望を根付かせる活動はAMDA鎌倉の力添えなしでは語れない。緊急救援支援活動も同様で、AMDA鎌倉クラブの活動のますますのご発展とご健康を祈念申し上げます。

HIV／エイズ　AMDA実践報告セミナー

ー学校でHIV／エイズをどう伝えるかー

10月11日（祝日）、岡山国際交流センターにおいて、HIV／エイズ　AMDA実践報告セミナーを開催しました。

第1部：HIV／エイズと国際協力
　学校でHIV/エイズをどう伝えるか（国際理解教育とエイズ）　AMDA　近藤麻理
　AMDAのHIV/エイズ対策プロジェクトについて　AMDA　田中一弘
　JICAのHIV/エイズ対策
　独立行政法人国際協力機構　人間開発部第4グループ感染対策チーム　遊佐　敢氏
第2部：岡山のHIV/エイズ状況
　岡山県内の現状と診療やケアに係わる団体等の紹介　岡山市保健所所長　中瀬　克巳氏
　岡山におけるYouthの活動　AIDS　Activists　（A2）
第3部：HIV/エイズ予防教育ワークショップ
　AMDAホンジュラスプロジェクトHIV/エイズ予防教育を体験
　AMDAホンジュラス　渡辺　咲子
今後の展開について　AMDA　鈴木俊介

助成：　財団法人　福武文化振興財団
主催：　AMDA
協賛：　おかやま国際貢献月間協賛事業（岡山県）
後援：　岡山県教育委員会・岡山市・岡山市教育委員会・独立行政法人　国際協力機構中国国際センター

HIV/エイズは世界規模の深刻な問題であり、日本も決して「他の国のこと」ではすまされません。近年、日本において、若者の性の若年化や、性感染症の増加などが報告されており、HIV/エイズの流行も懸念され、予防教育の必要性が高まっています。AMDAは、中南米、アジア、アフリカの各地域で、HIV/エイズ対策プロジェクトを実施しています。中でも、予防教育については、現場での経験を蓄積し、その手法が確立しつつあります。そこで、その経験を、日本、とりわけ岡山でも活用しようという主旨でこのセミナーを開催しました。国際協力というと、日本から海外へという一方向だけになることが多いですが、HIV/エイズの予防については、日本でも遅れており、双方向的な協力が必要になります。そういった意味でも、今回のセミナーは大変有意義な機会となりました。

当日は、AMDAのHIV/エイズ対策プロジェクト、JICAのHIV/エイズ対策、岡山のエイズの状況、そしてAMDAホンジュラスの予防教育ワークショップの実践と大変盛りだくさんの内容となり、80名という多くの方々にご参加いただけました。このセミナーを出発点として、岡山、日本、そして海外の間で双方向的なHIV/エイズ対策が進められるよう期待しております。この場をお借りし、来賓の方々、講演いただいた講師の方々、そしてご参加いただいた皆様に、感謝申し上げるとともに、今後ともご協力をお願い申し上げます。

＊岡山市保健所による**エイズ・性感染症ホットライン**　電話　**086-803-1269**
エイズ・性感染症相談・検査　予約はエイズ・性感染症ホットライン　原則無料・匿名
＊HIVと人権・情報センター岡山支部による**夜間相談電話**　電話　**086-232-5990**

バングラデシュ対洪水支援活動－中間報告－

◇

AMDA職員　岡崎　裕之

7月上旬～8月上旬にかけて全土で大規模な被害をもたらした洪水は、その後徐々に水が引くにつれて、次第に混乱も収束していった。9月中旬の集中豪雨によって東部コミラ郡においてダムが決壊、20ヶ村・数千人の人々に被害が出たりしたものの、例年9月中～下旬は雨期の終わりの名残とでもいうべき集中豪雨があり、まるでそれが通過儀礼であるかのように、その後乾期に突入するというケースが多い。本年度は10月に入ってもまだ雨模様の日々が続いているが、幸い7～8月のような惨事を引き起こすほどの事態には至っていない。雨期が明けると、今度は今までの日々が嘘のような晴天の毎日になる。5月までの長い乾期の始まりである。

今回の洪水では全土で総額9000億円以上の被害が出たと推定されている。

緊急救援としての活動は一段落し、今後はインフラ整備や家屋再建など復興支援に焦点を当てた活動が中心になってくる。

以下、10月中旬までのAMDAの活動を簡単に報告したい。

＜巡回診療＞

8月中旬に平年並みの水位に下がってから1ヵ月半ほど経過し、感染症への危惧もひとまず一段落したため、当初の予定通り、9月末で巡回診療を終了した。2ヶ月間で診察した村人は約8000人にのぼる。今後はAMDAヘルスセンターでの診察業務を継続することになる。

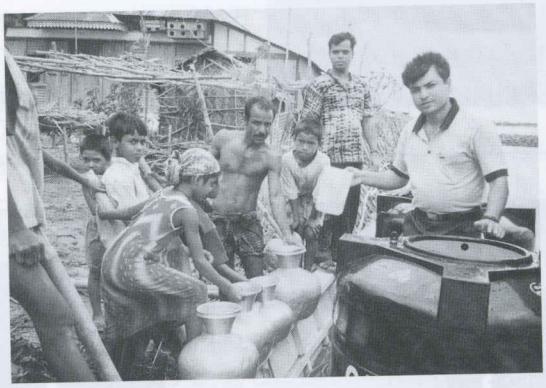
巡回診療では2チームに分かれ、1チームは村の民家を借りての診療、もう1チームは各民家を訪問して、診療・施薬を行った。乾期は普通の農道が、雨期の増水によって膝まで水位が上昇した地域も多く、ボートで各家庭を訪問しての診察は交通の不便な地域に居住する村人には非常に喜ばれた。

また、洪水による感染症患者の爆発的増加が懸念されていたが、巡回診療開始直後は下痢症患者などが多く見られたものの、9月末の終了間際には全患者数のうち感染症患者の占める割合が4割程度減少した。これは巡回診療自体の効果もさることながら、診療時に保健衛生教育を実施したことや、安全な飲料水を巡回供給したことも多分に影響していると思われる。

＜飲料水巡回供給＞

AMDA職業訓練センター地下より汲み上げた安全な飲料水の巡回供給は10月末まで予定されている。現在政府が各地を巡回し、生活排水等が混入して汚染された井戸の分解洗浄を行っているが、ここガザリア地区では11月末～年内の完了見通しである。

巡回で供給できる飲料水は限られているので、塩素消毒液を配布し使用法の講義を行った上で、井戸水に混入しての利用を推奨している。最初は塩素臭に抵抗感を示す村人も多かったが、巡回時にスタッフが保健衛生教育を徹底することによって利用する住民も増えてきた。ただ、塩素消毒液は殺菌効果があるものの、バングラデシュ全土で蔓延している砒素問題への解決策とはならず、各地に点在する砒素汚染の疑いのある井戸については今後の対応課題となっている。



＜家屋再建＞

10月初旬で受益者の選定を終了した。乾期に入り屋外での建設作業に支障が出なくなる。10月下旬より再建作業がスタートする予定である。一般にバングラデシュの農村家屋は、寝室・台所・家畜小屋・トイレ・居間等が1つ1つ独立して存在しており、敷地内のそれらすべての総称として1軒の家屋と定義している。現地聞き取り調査の結果、家畜小屋・トイレの改修に対する要望が多く、できるだけ住民の要望に沿った形で再建を行う。

AMDAは建築資材のみを提供し、住民自身によって再建作業が行われる。建設作業が適切に行われているかの確認のため、AMDAスタッフが適宜巡回調査することになっている。　なお建設は本年度内に完了する予定である。

雨期明けの9～10月は乾期の終わりの4～5月と並んで1年で最も暑い時期である。11月頃から徐々に涼しくなり、3月初旬まで日本の春のような最も過ごしやすい時期を迎えることになる。地域差もあるが、この間雨はほとんど降らず、耕作用の灌漑用水ポンプを利用する農民の姿をあちこちで見かけることになる。雨期にあれだけ苦しめられた洪水だが、乾期は逆に水不足で悩まされるわけである。

毎年のように発生する洪水。日本人の目からすると護岸工事等なんらかの対策を取ればいいのに、と思えたりもする。しかし、洪水による被害は甚大であるが、同時に土壌が攪拌されることによって肥沃な土地が形成されるという利点もあり、下手に環境を変えることはこの利点を失うことにもつながる。また、雨期には増水することが目に見えている地域、例えて言えば川の中洲のような場所に家を構えている住民も多く、そうした地域に住まなければ随分と被害は減少するだろう。然しながら日本の人口密度の約3倍というこの国では、その日の糧にも事欠くような貧しい者達にとって、ただ同然の安い土地を求めることは必然的に悪条件の地域にしか住めないということになってしまうのである。

日本の4割ほどの国土に1億3千万人もの人がひしめくバングラデシュだが、それはつまりそれだけの人口を養うことができる肥沃な土地があるということの証でもある。過密人口で天災も多く、最貧国のうちの一つとして数えられるが、米の収穫の時期にはあたり一面の水田が金色に輝き、「黄金のベンガル」という呼名を持つ大地は例えようもなく美しい。この国の発展と人々の幸せのためにAMDAとして今後も支援活動を行っていきたい。

ハイチ洪水緊急支援活動

AMDA職員　柳田　展秀

1. はじめに

2004年9月18日、カリブ海の島国ハイチ共和国では、ハリケーン「ジーン」の影響による大規模な水害が発生しました。同国では中部・北部を中心に猛威をふるい、死者1,870人、行方不明者884人、被災者300,000人以上（10月10日現在ハイチ政府発表）とされています。ジーンは洪水被害だけではなく各地で鉄砲水や土砂崩れ、地滑りなどありとあらゆる水害を各地におよぼしました。

ハイチ共和国はカリブ海に浮かぶイスパニョーラ島にあります。島の西側半分がハイチ共和国、東側半分がドミニカ共和国と1つの島に2つの国が存在しています。これは17世紀初頭のヨーロッパ諸国の植民地獲得競争によるもので、当時ドミニカ共和国はスペイン領、そしてハイチはフランス領として支配に置かれていました。独立後も、その名残でハイチはフランス語、ドミニカではスペイン語が公用語として使われています。また、ハイチ共和国のあるイスパニョーラ島はアメリカ合衆国・フロリダ州から南に約900kmに位置し、マンゴー、コーヒーの生産・林業などを中心に人々は細々と暮しており、カリブ海諸国の中でも最貧国としても知られています。

現在、ハイチ共和国はアレスティッド元大統領の国外退去に伴ない、暫定政権下での国家運営が行われています。元々不安定な政治情勢の中、本年5月には同国東部地区を襲った豪雨被害、そして今回のハリケーンジーンによる水害と本年2度目の大規模災害に見舞われています。本来、災害対策機関であるCivil Protection Commissionも十分に機能を果たせていません。その為、現在は国連関係機関などが中心となり災害対策に着手しています。

2. 被災状況

ハリケーン「ジーン」は9月18日、19日の2日間にわたりハイチ中部地方に大量の雨をもたらしました。主に報道にあげられているゴナイブ（Gonaives）市を中心に、グロモン（Gros Morne）市・シャンソーム（Chansolme）市・ポルドペ（Port-de-Paix）市など被害は中部・北部全域に広がりましたが、地理的条件によって被災状況は大きく異なります。しかし、倒壊家屋数や農業被害など被災の全容は、まだハイチ政府ですら把握できていません。

1）ゴナイブ（人口約25万人）：海山に囲まれた都市型災害

ゴナイブは三方を山々に囲まれ、町の西側のみが海に面し、しかも海抜0m地帯という立地のために大きな被害を受けました。9月18日ジーンによる豪雨は山から木々をなぎ倒し流れ下りましたが、海に押し戻され、行き場を失って町に溢れました。当時町の殆どの機能は停止し、排水と雨の混ざった水は最高3m近くにも達し、人々を追い詰めました。人々は屋根や高台に避難し不安な一夜を過ごしました。3週間経った現在水位は下がったものの、それでも場所によっては50cm近く水が残っています。今は町中が排水とヘドロの混じったような悪臭が漂い、泥の町と化し、とくに町の南側では、乗用車などでの通行が困難な場所も多数残っています。

2）グロモン市（約10万人）：増水による浸水

一方、グロモンはゴナイブから北に30km、四輪駆動車で1時間ほどかかる高台の小都市です。三本の河川に囲まれた高台にある中心部は被災は免れたものの、増水により下流に点在する小さな集落は呑み込まれ、最終的には南のゴナイブまで流れ込みました。住居が倒壊した約400人が、現在でも避難所生活を送っています。

3）シャンソーム市（約2万人）とポルドペ市（約12万人）：鉄砲水

さらに、河川の下流に位置するシャンソーム市とポルデペ市は一滴の雨も降らなかったにも関わらず、鉄砲水に直撃されました。グロモンからトロワ・リビエル（TroisRivieres）河沿いに北に約60km下ったところにあるシャンソームには、18日の深夜、川が濁流となって町に流れ込みました。通常の水位が1m程度で、また町とは2m程度の高低差があったことから推測すると、最大で4m以上水位が上がったものと考えられます。町は上流から流されてきた草や木、そして石などにより被害を受け、中には川岸ごと家屋をさらわれている場所もありました。

また、北西部最大の都市ポルドペでは、とくにポーラーン（Paulin）地区とトロワ・リビエル（TroisRivieres）地区では、3週間経つ今も避難所で暮らす住民が大半です。ほとんどの家屋が河川から拾った小石をセメントで固めて作った簡易なもので、流れ込む濁流には何ら意味をなすものではありませんでした。被災地を歩いていると、そこにはまだ発見されていない遺体があるためか、時折異臭が漂います。

3. 支援活動

AMDAでは9月30日から、現地の協力団体であるMontfortain Missionaries[1]（以下モンフォルタン修道会）と共に、グロモン市・シャンソーム市・ポルドペ市を中心に支援活動を実施しました。

1）被災者に対する支援物資（生活物資・食料・医薬消耗品）の提供

AMDAでは、9月29日グロモン市の地元災害対策協議会と協議し、モンフォルタン修道会が避難所として提供している職業訓練センターにて実施する事で合意し、さらに医薬用品は、同市保健センターにて配布することになりました。避難所には、洪水や鉄砲水により家屋を失ったり、生活が困難な状態にある約400人が生活していました。これらの被災者に約300人分の歯ブラシ、歯磨き粉、石鹸など生活支援物資を主に配布し、住民が共同で利用できるよう懐中電灯や乾電池なども配布しました。また10月5日から7日までの期間、北端の町ポルドペ市のポーラーン地区・トロワ・リビエル地区の被災者約30家族に対し、約1週間分の米、豆、食用油、魚缶詰などの食糧支援を被災者自身も参加して実施しました。

2）北部被災地域の状況調査

9月30日から10月2日までの3日間、同国政府の依頼により、グロモン市・シャンソーム市・ポルドペ市において被災状況の調査活動を実施しました。北部地域には、政府の出先機関などが無いため行政機関が十分に機能していません。AMDAでは、上記地域で実施した支援活動と平行して被災地域での状況調査や市町村関係者などからの聞き取り調査などを行いました。10月3日には一旦首都ポルトープランスに戻り、Civil Protection Commissionに上記3地域の被災状況の報告と、今後必要と考えられる食料などの輸送について提案・協議しました。

3）日本政府支援物資の輸送・配布

9月29日から30日の2日間、日本政府からハイチ政府に提供された緊急支

両親を失った子どもたちも少なくない

ポルドペ市での食糧配給

援物資の輸送・配布を委託され、実施しました。AMDAでは、まだ支援が及んでいないていない北部被災地域（グロモン市・シャンソーム市・ポルドペ市）への輸送・配布を提言し、これら物資の輸送・配布を実施する事になりました。輸送物資は、発電機4機・テント4張・毛布100枚・マットレス30枚・水タンク（5L）60個などで、車輌3台に積込み、上記3地域へそれぞれ輸送・配布しました。

4. まとめ

ハリケーン「ジーン」により多数の死傷者を出したゴナイブでは、現在でも多くの人々が避難生活を送っていますが、そこには運良く避難所に入れた被災者、避難所に入れず崩壊し泥まみれになった家に寝泊りする家族など状況は様々です。

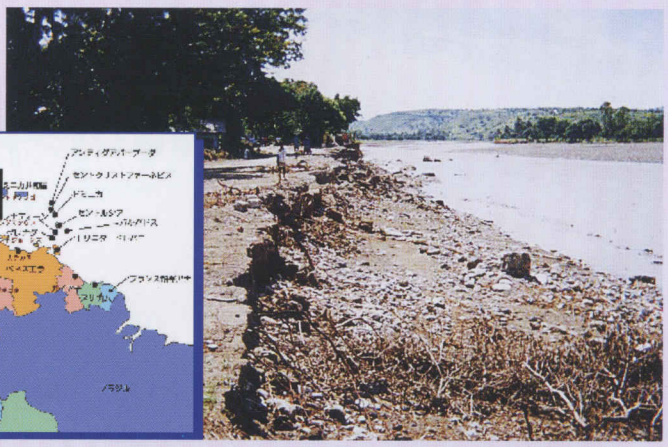
ここでは都市構造の欠点である上下水道の整備不良により、排水は町に留まったままで今後は感染症、皮膚病などの蔓延も危惧されています。定期的に行われる食糧配給だけでは生活が困難な為、多くの被災者は食糧を求め、各国からの支援物資の集まる倉庫に連日集まり、食糧不足を訴えています。北部地域では農作物の被害が甚大で、主食の米・豆・バナナ等の収穫は最短でも6ヶ月間は見込めません。特に北部の農村地帯では農作物や家畜はお金に等しい価値を持ち、今後政府や国際機関の支援無くしては生活が成り立たないと予想されます。各国からの支援物資などの多くはゴナイブ市のみに集中し、北部地域の被災地には支援がまったくなされていませんでした。水害被災者がこれまで通りの生活を取り戻すまでには、今後1年以上を費やすことが予想され、AMDAでも、引き続き現地協力団体を通じた支援を検討しています。

今回の緊急救援活動は、多くの個人・団体の方々からの支援により実現する事が出来ました。現地情報など、NPO法人e&g研究所（広島県）からさまざまなアドバイスをいただきました。またハイチ国内においては、前在日ハイチ大使のマルセル・デュレ氏のご協力により、円滑な政府関係機関との交渉を進める事ができました。さらに被災者自身が救援活動に参加したことは、今後の被災地の復興を推し進める一つの力になると私には感じられました。

最後になりますが、被災者の方々からのメッセージを紹介します。「日本の支援者の皆さん、またAMDAの皆さんのご支援を心から感謝しています」。私の訪れた地域の人々は必ずこのメッセージを伝えるようにと口々に言われました。

[1] Montfortain Missionariesはフランスに本部を置くカトリック修道会で、ハイチでの活動の歴史は100年前に遡ります。現在ハイチ中部・北西部を中心に、飲料水支援・学校、病院運営など地域住民に密着した活動を展開しています。

ハイチ共和国略地図



グロモン市周辺　川岸がえぐり取られている

募金のお願い

郵便振替　口座番号　01250-2-40709　　口座名　AMDA

※通信欄に「ハイチ洪水」とご記入ください。

トラベルには、
トラブルの備えを。

TOKIO MARINE
NICHIDO
ミレアグループ

◎世界各地からの相談に24時間365日、
日本の海外総合サポートデスクで集中対応。

◎提携病院で、現金なしで治療が受けられるキャッシュレス・メディカル・サービス。

◎快適なご旅行をお楽しみいただくために、事故や病気の有無に
かかわらずご利用いただけるサービス「トラベルプロテクト※」付き。
※トラベルプロテクトは、保険期間3ヵ月までの弊社がおすすめする「タイプ契約」に限ります。

ワールドワイドなネットワークであなたの旅をバックアップ
海外での安心のパートナーには、ぜひ東京海上日動をご指名ください。

海外旅行保険

海外旅行傷害保険（海外旅行保険特約付）

東京海上日動火災保険株式会社　東京都千代田区丸の内1-2-1 〒100-8050
お問い合わせ先：0120-868-100 平日/午前9:00～午後6:00（土日・祝日は休日とさせていただきます。）
ホームページアドレス　http://www.tokiomarine-nichido.co.jp/

東京海上日動

AMDA Journal — 国際協力 — 2004年11月号

2004年11月1日発行（毎月1日発行）VOL.27 No.11　1995年11月27日　第三種郵便物認可　定価600円
発行／AMDA　〒701-1202　岡山市楢津310-1　TEL 086-284-7730　FAX 086-284-8959

AMDA ホームページ
http://www.amda.or.jp/